



「誰かのために」生きる

「散るという 飛翔のかたち 花びらは ふと微笑んで 枝を離れる」 俵万智
(桜の花びらが散っていく様子を詠んだ句なのでしょう。植物は、花が散った後、実がなり、種ができて次の年に花を咲かせます。儂さの中にも希望が感じられる歌です)

春本番です。

桜、菜の花、チューリップ等の花が次々に咲き、私たちの目を楽しませてくれています。多くの人たちが新しい年度に向けて、心を新たにしていることでしょう。

新しく小学校に入学する小学1年生、新しく中学校に入学する中学1年生、そしてどのこどもたちも、学年が1年ずつ上がり、新たな環境を迎えることとなります。夢と希望を持ってスタートを切ってほしいものです。

皆さんは、「大河の一滴」という本を読まれたことがあるでしょうか。

著者の五木寛之さんは、昭和7年生れ。戦前、戦中、戦後を生きられた今年93歳の作家です。厳しい時代を生き、乗り越えられた五木さんの言葉は、私たちの生き方に示唆を与えてくれます。ここで素敵な言葉を紹介しましょう。

昨年秋から今年(2025年)にかけて、私は思いがけない体験をした。いやでも人生の「最終章」を意識せざるを得ないような事態だった。いま、こうして新しい本を書きあげることができたのは、僥倖とでも言うしかない成りゆきのせいである。その1年あまり、私は20代の青年のように〈人はなぜ生きるのか〉を考え続けた。生きる目的というか、実感としてそれを考えざるをえなかったのである。……

……私のたどり着いた結論は、きわめてシンプルなものだった。「人は誰かのために生きる」という素朴な結論である。「自分自身のために」では力が出ない。私は敗戦後、生きようとしてそれがはたせなかった母のために生きようと思った。一日でも長く生きるためには、目標がなければならぬ。何かのためでなく、誰かのために、という思いがエネルギーとなって自分のエネルギーとなって自分の命を支えるのだ、と私は思う。……

……人はただ生きながらえることを目的に生きることはできない。「何かのために」生きるのではない。「誰かのために」生きるのだ、という目標こそが、本当の生きる力になるのではないかと思うのだ。……

「大河の一滴 最終章」 五木寛之著 幻冬舎

五木さんは、「誰かのために」生きることが、本当の生きる力になるのだと言っておられます。人は誰も幸せになることを願いに生きています。これも大切な生き方なのでしょう。でも、「誰かのために」生きるということを考えた生き方も自分が幸せになれる生き方なのではないでしょうか。今日、こどもと一緒に幸せな生き方について考えてみませんか。

「青少年育成センターだより」も発信し始めて11年目を迎えました(これまでのものは、防府市のホームページに載せています)。これからも、子育てやこどもへのかかわり方について発信していきますので、よろしく願いいたします。

青少年育成センター指導員 藤村